
パラサイトドリーム

もみじ珠熙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラサイトドリーム

【Nコード】

N2085Y

【作者名】

もみじ珠熙

【あらすじ】

過去の傷を抱える楓。担当医である町田。

楓はしだいにおかしな夢を見るようになる。その夢で繰り返られるストーリーと、現実の世界で繰り返られるストーリー。

2つの世界で楓が見るものは…。

実際に私が見た夢を題材に書きました。

僕らの世界（前書き）

これから始まるストーリーの幕開け、
第一話です。よろしくお願い致します。

僕らの世界

私は何故、ここに生き、ここに在るのか、いつも問い続けてきた。ここにいたいから、と望んだわけではない。

ただここが、私に用意された世界なだけなのだ。だから、ここで生きるしかないだけ。

ただ毎日を、この世界の法則に従い生きる。

> i 3 4 1 2 1 — 4 3 3 3 <

冬の風邪はとても冷たく、彼女の両手はコートのポケットへと移動した。

長い黒髪に黒のPコート、黒のロングスカートに黒いブーツ。全身真っ黒で彼女は病院に現れた。受付に診察券を渡す。

受付の看護婦が、優しい笑顔で問いかけた。

「あら、楓ちゃん、今日はいつもより早いわね？診察時間まで待つてもらえるかしら？」

表情を変えずに、彼女は頷き、待合い室の端の椅子に向かった。

チラリと時計に目をやると、10時30分。

予約していた診察時間は11時だ。

いつもはギリギリにしか来ないが、今日はいつもより30分も早く着いてしまったことに、彼女は少し驚いていた。

担当医である町田は、目尻にカラスの足跡のような皺をつくり、楓を迎え入れた。

「こんにちは。体調はどう？」

「特に変化はありません。」

「そう。今日はいつもより早めに来てたみたいだけれど、何かあったのかい？」

町田は、パソコンに向かい、キーボードに指をのせながら、楓に問いかけた。

「意識して早めにきた訳じゃありません。ただ…」

楓は言葉を考えている様子で、しばらく宙を見ていた。

そのうち、淡々と話し始めた。

「最近、声が聞こえてくるんです。」

はつきりとじゃあないんですが、声が。

私の心の声と言うわけではなくて、他人の、それも知らない声で。」

町田のキーボードを打つ音が響く。

「その声は、君に話しかけてくるのかな？」

町田は、手を止め、楓の表情を確認するかのように見つめる。

「話しかけているのはわかりません。だって私はその声に返答しないし、そうするとその声が、無視しないで！と言うわけでもありませんから。」

また、カタカタと町田の指が動き始めた。

「ふうん、そうか。例えば、その声は、何て言っているのかな？」

「はい、君は一人じゃない、と言ってきたことがあります。後、覚えているのは、迎えに行くから、と。」

「君を迎えに行くということ？どこに迎えに行くんだい？」

「さあ。知りません。」

「先生はピアノ弾けますか？」

「なぜそんなことを聞くの？」

「先生のタイピング、ピアノみたいだから。」

「ああ、そうだね、でもピアノは弾けないと思うよ。触ったこともないんだ。」

「ふうん、期待外れです。」

「はは、ごめんね。」

町田は謝りながらも嬉しそうに笑った。

楓を見送った後、町田はパソコンに向かい、気が重くなった。何か悪いきっかけがあったんじゃないだろうか？薬のせいだろうか？彼女がこれ以上ふさが込む姿は見たくない。彼女の傷をえぐるようなことがなければいいのだが。

楓と初めて出会った日を、今でも忘れない。

八年前、楓は中学2年生、僕は28才で、当時楓の担当医は僕の父であった。僕は新米だったから、父の後ろで二人のやり取りを見ていただけだった。

楓はどんなに父が優しく接しても、父に怯え言葉も上手く話せずにした。かと思えば、これは夢だ、夢だ、とわめき、自分を殴り始めた。

事件のことは知っていたので、そんな楓を見ていると胸が張り裂ける思いだった。

父が引退し、僕が独立すると同時に、楓はここに来るようになった。楓は22才になり、大人になったのに、今でも傷は深いまま、孤独に生きている。

事件の犯人も見つからないままだ。

楓を抱きしめてやりたいと何度も思うが、立場上、僕に出来るのはカウンセリングし、薬を出す以外何も出来ないのだ。

今日の発言は明らかに症状の初めだ。

僕はなんて、無力なんだろう。

町田は、光が眩しく感じて、カーテンを閉めた。

僕らの世界（後書き）

読んで下さった方、どうもありがとうございました。
感謝です！

これからゆつくり話が動き出していきます。
次回もよろしくお願い致します。

彼女の世界

「うおおおおお!!!」

彼女は大きなナイフを取り出し、勢いよく走り出した。そしてぐつと両膝を曲げ、地面を蹴り上げると、宙に舞った。

まるでワイヤーアクションのようだ。

しかし彼女は吊されているわけでもなく、羽が生えている訳でもなさそうだ。

普通ではあり得ない高さまで飛んでいった。

そして、ゴジラのような巨大な敵？らしき怪物と戦い始めた。

先程取り出したナイフを怪物の頭に突き刺す。

「ヴオオオアアア!!!」

怪物は機械音のような悲鳴をあげた。

タコのようにウネウネとした腕を、彼女に向かって伸ばすと、その先が巨大なライフルに変化し、バンバンバンと銃声が鳴り響く。

彼女はそれらをすべてスルリとかわし、怪物の足にナイフを突き立て、動けなくしてしまった。

「もう遊ぶの飽きたわ。悪いけど、死んでもらうよ。」

彼女は素手を怪物の眉間の辺りにつつこんだ。

そこはさつき、ナイフで突き刺した場所だったので、素手のパンチでも充分に威力を発揮したらしい。

「ギヤアアアアウウウウ!!!」

叫ぶ怪物を尻目に、彼女は穴の開いた場所を両腕で押し広げ、しま
いには頭を真つ二つに割ってしまった。

ズドォーン

怪物は白目を剥き、口から何かドロドロしたものを出していた。

「きつたない死に様ね。頭、腐ったカボチャみたいよ。あははっ！」

彼女は血まみれになつた身体で笑っていた。

夢だ、変な夢を見ているんだ、私。

気づいた瞬間、はつとした表情で彼女が振り向いた。顔を見て、背
筋が凍った。

私と同じ顔――

「あ。」

楓は目を覚ました。

いつもと同じ天井。いつもと同じ部屋。よかった。すごく気持ち悪
い夢だった。

そつと壁に頬をつける。ひんやりと冷たい。ふと思い出が頭をよぎ
る。母さん、兄さん、翼。私だけ、どうして生きているんだろう。
一人ぼっちの世界は、重く、暗い。先生だけが、唯一の存在だ。で
も、いつか先生も私を見捨ててしまふんだろう。人は何故、今起こ
つてもいないことを、不安に感じるんだろう。自分が傷つくことを

こんなにも恐れるんだろう。強くなりたい。

《楓、楓、》

呼びかける声が聞こえた。

またか。

鳥の鳴く声が遠くで聞こえ、ガヤガヤと雑談する声が近くで聞こえた。講義が終わった合図だ。次はなんだっけ。

楓は教科書をまとめ、席をたった。

「君は死にそびれたと思っているようだけれど、実際は心が死んだんだから、死んだ彼らとなんら変わらないよ。」

ゆるいパーマをあてた少年が、そこに立っていた。

> i 3 4 1 5 0 — 4 3 3 3 <

「あなた、何を言っているの？」

眉間に皺をよせ、不機嫌そうに楓は言葉を返した。

「事実。」

彼は、にやりと口元が動いた。

気持ち悪い存在を無視することにし、楓は颯爽と歩き出した。人とはなるべく関わりたくない。吐き気がしたので、トイレに向かった。

彼女の世界（後書き）

読んで下さった方、どうもありがとうございます。
少し、物語が動き始めました。
次話もよろしくお願い致します。

憧れる者、怖がる者。

彼女はいつも遠くを見つめていた。

遠く、というよりも、私達には見えない何かを見ているようだった。初めて今日、彼女が誰かと話しているのを見た。すごくドキドキした。

彼女は私の存在なんて知らないだろうけれど、いつか話をしてみたい。彼女の笑う顔が見てみたい。友達の真帆や満、間宮君も、彼女に興味あるみたい。

彼女の長い黒髪に憧れて、私は髪を伸ばした。あの影のある雰囲気は、私に出せそうにはないけれど。

来年、卒業するまでにせめて一度でいいから話ができたらいいなあ。

「美羽く、あんたレポートの課題いつ出す？」

「えっっ！！？あ、ああ、ごめん、何？もう一回言つて？」

「…もういいよ。また妄想の世界に入り込んでたんでしよう？」

満はくりくりと短い髪を指でいじりながら睨み付けた。

「うーん、妄想っていつか、なんて言うか…」

あのさ、城崎さんって、彼氏とかいるのかな？」

「はあ？」

「いや、だって結構美人さんだよ？でも大学で一度も誰かと話してるの見たこと無いし、あつ、でも今日誰かと話してたみたいだったから…」

「まさか、あんた、女が好きなの？？」

驚き、声を一段と高くして満が叫んだのでこっちまで驚いてしまった。

何てことを大きい声で言うのよ、本当にやめてよ。

家に帰ると、人が立っていた。恐怖になり、パニックを起こしてしまった。

「何、してるの？」

教室で話しかけてきたあいつだ。

何故、私の家にいるんだ？どうやって入ったの？血の気が引いていく。呼吸が苦しい。

「君はどんな家に住んでるのか気になって、入ってみた。」

パーマ少年はくりりと振り返り、にやりと笑う。私は彼に返す言葉が出てこなくなり、すぐに病院に電話をかけた。

「先生！知らない人が私につきまとっているんです！誰かわからない！勝手に家に入ってきた！学校にもいた！きっと私のことを見張ってるんだ！怖い！」

彼女は久々にパニックを起こしていた。息を切らせながら、ボロボロと涙を流している。

「楓ちゃん、大丈夫だよ。ここには君と僕しかいないから。大丈夫。僕は君の味方だ。」

彼女は泣きながら事情を説明してくれた。

とりあえず薬を処方したが、もし効かずに悪化してしまえば、入院も考えなければならぬ。普通は多大なストレスを感じた場合に、こういった悪化が見られるのだが、今まで特にこれと言ったきっかけはなかったはずだ。

原因を突き止めなければ、治療することも出来ないし、どうしたものか。

帰宅の準備をしていると、受付の看護婦が声をかけてきた。

「先生、楓ちゃんがまた来ています。どうしますか？」

「一旦帰ったはずじゃなかったのか？」

「帰ったと思いますが、また来てるんです。でも受付に来るわけではなくて、ずっといつもの席に座って眠ってるんですよ。起こした方がいいですよねぇ？」

「いや、何か話があつて来たのかもしれない。さっきはパニック起こしていたからね。上手く話したいことが話せなかったのかも…。僕が残って話を聞くから、君はもう帰っていいよ。」

病院に二人つきりになったが、彼女は相変わらず寝たきりで、起きる様子がなかった。睡眠薬でも飲んだのだろうか？

しばらく様子を見てみると、彼女が急に叫び声をあげた。

「足が！足が！足がない！」

憧れる者、怖がる者。 (後書き)

読んでいただきましてありがとうございます。
まだお話は続きます。

第一の被害者

「おい！楓！」

考えるよりも先に手が彼女の肩にのつていた。

「せんせ……」

楓は目を覚ましたが身体を震わせて瞳孔までも小刻みにゆれていた。

「私、足を切り落としたんです！足を！」

「それは夢での話だろ？」

「私最近おかしな夢ばかり見るんです。」

私と同じ顔の同じ格好の人が、ただひたすら闘う夢なんですけど、今日は人を、人を相手に戦っていて、人の足を切り落としたんです。足を！」

「大丈夫だよ。夢の中の話なんだから。もしかしたら睡眠薬が合わないのかもしれないね。明日、処方してあげるから、明日も来れるね？」

彼女は震えながら、うなづき帰っていった。

古川はその日、苛つきながら家に向かった。もう11時過ぎだ。あの糞上司め。あいつのせいで残業までさせられて、明日だって朝早いのに。あーあ、大学生のころは楽しかったなあ。社会人がこんなに大変だなんて、思いもしなかった。ああ。携帯の着信に気づき、古川はカバンの中をあさぐりはじめた。すると突然後頭部に鈍い痛みが走った。

楓は朝のニュースをみて、思わず固まってしまった。

「昨夜、帰宅途中のサラリーマンが突然何者かに後ろから頭を鈍器
なようなもので殴られ、足を切断されるという悲惨な事件が起きま
した。

未だ犯人は見つかっておらず…

第一の被害者（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます（*、、
（
まだ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2085y/>

パラサイトドリーム

2011年11月17日17時46分発行